

深川市

深川市
 面積：529.23km²
 人口：26,318人（平成16年4月30日現在）
 町の花、木、鳥：キク（花）、シラカバ（木）、
 カッコウ（鳥）
 町名の由来：アイヌ語「オオホ・ナイ」の深い川と
 という意味
 ホームページ：
<http://www.city.fukagawa.hokkaido.jp/>



道の駅「ライスランドふかがわ」
 支配人 渡部 功

米のまち深川市が推進するライスランド構想 「いざないの里」は、今、マスコミでも注目の的

予想を上回る利用者の数に うれしい悲鳴

北海道のほぼ中央に位置する深川市は農業を基幹産業とし、なかでも「ほしのゆめ」や「きらら397」などのおいしいお米を生産する稲作地帯として知られています。この「米のまち深川」のイメージをまちづくりに生かし、地域の活性化を図ろうと市は「ライスランド構想」を打ち出し、4つの里づくりに取り組んでいます。

これは母なる川・石狩川や、雨竜川などが肥沃な大地を育み、恵まれた自然環境を背景に古くから米づくりのまちとして繁栄してきた深川市の文化や技術、豊かな空間づくりを次の世代に引き継ぐのを目的としたプロジェクトです。深川市の第4次総合計画のひとつとして、1997年（平成9年）から推進されてきました。10年の歳月をかけて整備していく大きな事業です。今回訪れた道の駅「ライスランドふかがわ」は「いざないの里」と位置付けられ、プロジェクト名をそのまま施設名に使用していることから、「米のまち深川」の総合情報基地として重要な役目を担っていることがわかります。

このほか「ふれあいの里」として深川市都市農村交流センター「アグリ工房まあぶ」があります。コ

テージ、加工実習室、多目的研修室、地場産品を使用したレストラン、近隣の「まあぶオートキャンプ場」は充実した施設が自慢です。「ぬくもりの里」の「ほっと館ふあーむ」では新鮮な地場の野菜などが販売され、旧向陽小学校を改修した「向陽館」では高橋要画伯の作品を見ることができます。「はぐくみの里」は米づくりの理解を深め、農業に携わる優れた人材を育成していくための建物などが、これから建設される予定です。

道の駅「ライスランドふかがわ」は、2003年（平成15年）7月1日にオープンし、全道では71番目の道の駅になります。若者に人気の旅行雑誌のアンケートで堂々の1位を獲得。取材時には、1周年が先か、利用者数100万人突破が先かと、予想を上回る反響にうれしい悲鳴を上げているところでした。

お米ギャラリーで精米体験、 レストランで釜炊き銀しゃり

札幌と旭川を結ぶ国道12号と、留萌・増毛方面への基点となる国道233号の交差点の角地に位置する



▲精米体験コーナー

▲深川産米「ほしのゆめ」

同道の駅は、その名の通りお米の魅力にふれ、お米をテーマとしているのが特徴です。全面ガラスばりの光あふれるセンターハウスは、一部吹き抜けになっており木がふんだんに使われています。テーブルやイスには地元のカラマツ材を使用し、木のぬくもりと開放的な空間に「ドライブの疲れも癒される」とは利用者の声。

子どもたちに大人気の「お米ギャラリー」では、プラズマディスプレイで稲作の紹介をし、パソコンを使いゲーム感覚でお米の知識が身につくようになっています。リピーターが多い精米体験コーナーは精米したてのお米が手に入り、そのおいしさは格別と評判。料金箱に200円入れると自動的に機械がスタートし、まず一定温度で保存された700グラムの精米の粉が取られ玄米になります。そこから精米され色や重さが選別され、最後に360グラム程度（茶碗4、5杯分）の白米は「今摺り米（いまずりまい）」として持ち帰ることができます。まさに、今、摺ったばかりのお米です。

グルメは道の駅の楽しみのひとつでもあります。2階にあるレストラン「味しるべ 駅通（えきてい）」は、待ってでも食べたいと行列ができることも珍しくありません。オーダーを受けてから1人前ずつ炊く「釜炊き銀しゃり」は、目の前に出てくるまで15分程度かかりますが、お米本来の味が楽しめます。待つ価値十分。深川産のほしのゆめをベースに独自の配合でブレンドし、香り、風味、歯ごたえ、ねばりなど、どれも群を抜いています。梅干し、納豆、焼き魚など白いご飯にあう厳選したおかずが用意され、日本人であることの喜びを実感すること間違いありません。ほかに地場産のそば粉を使ったそばなどもあります。

情報発信の場として活用してほしい

深川の名産品はもとより、幌加内のそばなど北空知の物産を広く紹介する「特産品販売コーナー」は



特産品販売コーナー

連日にぎわいを見せており、地元産のお米や名物「ウロコダンゴ」も並んでいます。

直売コーナーでは、フレッシュな牛乳がおい

しさの秘密というソフトクリームやいもだんご、大きくて食べごたえのあるおにぎりも販売されています。安全性にこだわった新鮮な深川産の農産物が買える「農産物直売所」は、消費者からの声がダイレクトに入り、相互の理解が深まることから生産者にとって有効な場となっているようです。

ドライブに欠かせない天候状況や観光スポットなどの情報をタッチパネルで知らせる「情報コーナー」は、同道の駅に寄ったら必ずチェックしたいコーナーです。施設の内容にセールスポイントを加えたホテル・旅館の紹介や、おすすめメニューを写真で紹介する飲食店の紹介のほか医療機関の情報もあります。各種印刷物やパンフレットも並び、深川市果樹協会が製作するマップ付きの観光農園の紹介は、ぜひ手に入れたいものです。これがあるとサクランボやイチゴなどの果樹園めぐりが楽しめます。

さらに、夏には「まあぶオートキャンプ場」にホテルの飼育施設があることから、ホテルの情報を発信する予定です。札幌市の子どもたちを招き田植えから稲刈りまで体験したのち、施設内の「精米体験コーナー」で精米してもらうなど、「4つの里」が協力関係を図りながら特色ある運営にも力を注ぎます。

最後に渡部功支配人は「施設の内容はもちろん、お客さまに提供させていただく商品や食事、そしてスタッフのさわやかな挨拶、どれも自信があります。道の駅を通して“深川って本当にいいところだな”と良い印象を持

っていただけるよう、これからも力を合わせてがんばっていきます。ともあれ、深川の美味しいもの、役に立つ情報は当駅におまかせください」と、力強い言葉で締めてくださいました。



天候状況や観光スポットを紹介する「情報コーナー」



全面ガラスばりの光あふれるセンターハウス